
カモフラージュ・ゼロ

H_Kirishima

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カモフラージュ・ゼロ

【Nコード】

N7085V

【作者名】

H | K i r i s h i m a

【あらすじ】

様々なコネクションを持つ迷彩君がハルケギニアに召還されてしまったら？っというお話です。

第1話：召還

「ゼロのルイズがまた使い魔召還に失敗しやがったか!？」

爆発の衝撃で砂埃が舞う。

いつもの見慣れた光景だったが、今日だけは違った。
砂埃の中に影が見えたのだ。

「やった！成功だわ！」

影あることを確認すると、桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ少女。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは喜んだ。

「（私だって魔法が使えるんだから！もうゼロのルイズなんて呼ばせない！）」

ルイズは影に向かって駆け出す。

どんな使い魔が召還されたのだろうか。
頭の中はその事でいっぱいだった。

そして影のところまで行って気がつく。

「・・・人？」

目の前には、見たこともない緑色の服と、
背中には大きなリュックサック。

左手には鉄の箱。

そして右手には長い鉄の筒を持った男が立っていた。

- - - - -

カモフラージュゼロ

第1話：召還

- - - - -

「・・・何者？」

「いや、それはこっちの台詞なんだが。」

男は戸惑いの表情を浮かべている。

「おい、みるよ。ルイズが平民を召還しやがったぜ！」

砂埃が晴れ、その男が見えるようになった時に、
まわりから声があがる。

「・・・あなた平民なの？」

少しの希望を持って尋ねる。

自分が見たことの無い服装。所持品

であるのならに一つの可能性だが、
何処かの貴族かもしれないと考えながら。

「ふむ。僕は特権階級では無いから、

あえて言つなら平民だろうね。」

男からその言葉を聞いてルイズは落胆し絶望する。

召還は成功したが出てきたのはただの平民。

『魔法使いの実力を知るためには、その使い魔を見る』
と言われているのに出てきたのはただの平民であれば、
『ルイズは所詮その程度』と思われるのだ。

「ミスタ・コルベール！」

大声で叫ぶ。この嘲笑の中で相手に聞こえるように。

「なんだね。ミス・ヴァリエール」

「もう一度、もう一度召還させてください！」

コルベールと呼ばれた男は、一瞬考え込む姿を見せたが、
きつぱりと言い放った。

「ダメだ。ミス・ヴァリエール。それは認められない。

決まり事を曲げるわけにはいかない。」

苦虫を噛み潰したような顔をするルイズ。

そして意を決したかのように、召還した男に近づく。

「貴方、感謝しなさいよね。貴族が直々にこんなことするんだから
！」

そしてルイズは男の前で小さな杖を振り、詠唱を始める。

男は、意味が分からないという顔でルイズの動きを見ていた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ
エール。

5つの力を司るペンタゴン。

「この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

ルイズは男の頭をつかむとキスをする。

男は抵抗しなかった。いや出来なかった。

何故なら、思考が追いついてないうちに行われたからだ。

「何だ！？身体が熱い！」

「すぐ、終わるわよ。」 使い魔”のルーンを刻んでいるだけだから。

「

男は熱さに耐え切れずうずくまる。

そして、何かをあがめるように両手を天に掲げた。

「うおおお！？スタイナアアア！！」

誰かの名前を叫んだ瞬間に、男は気絶した。

大声に驚いたのか、周りからの声は聞こえず、

あたりは静寂に包まれる。

「・・・ミス・ヴァリエール。終わったか？」

「ええ、終わったと・・・思います。」

コルベールは、男に近づき左手の甲をみる。

ちゃんとルーンが刻まれているか確認するために。

「ふむ。これは珍しいルーンだ。メモをとっておこう。」

男の左手に刻まれたルーンのメモを取った。

そして、取り終わったところで見守っていた生徒達に向かつて授業の終わりを告げる。

生徒達は、各自石造りの建物に戻っていく。
置いていかれたのはルイズと召還され気絶した男。
ルイズは気絶している男を見て呟く。

「はぁ・・・何だつてのよ・・・」

第2話：その名は迷彩君

.....

第2話：その名は迷彩君

.....

「白い・・・白い道が続いている・・・

その先に神殿が・・・そうかあれが・・・」

男は長めのソファアーの上でうなされていた。

椅子に座り見つめているのは、

桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ少女

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

ソファアーでうなされている男を召還した本人だった。

男が何を言っているか分からないが、

自分の知らない言葉ほど気になるものだ。

ルイズも興味から、聞き取りやすいように顔を近づけていく。

男、一呼吸おくと目を開き喋った。

「ヴァルハラ」

目が合ってしまったルイズは椅子から転げ落ちた。

急いで立ち上がると握りこぶしを作り

「このお・・・馬鹿！」

といて男に向かって振り下ろす。
男はきつい目覚ましを貰い、現実に帰ってきた。

- - -

目覚めた男は、ノモトと名乗った。

何も知らないようで、ルイズが1から説明することになった。
世界のこと、魔法のこと、召還のこと。

ノモトはどこどこで質問し、その度に頭を抱えていた。

「とりあえず、自分が使い魔となった事は了解した。

それで何をすればいい？」

「そうね。使い魔の仕事は大きく3つ」

ルイズはノモトの前に三つ指をたてた。

「一つ目は、主人との感覚の共有。アンタが目にしたこと。耳にしたことを

私も感じることができの。」

「情報共有ということか。」

「二つ目は、主人に代わって素材。つまり薬草や硫黄なんかをとってくるのよ。」

「物資の調達か。それなら大丈夫だ。

ただ、ここの地理が分からない。地図か何かはないのか？」

「三つ目は、主人である私を守ること。」

「要人護衛か、それも問題ない。」

ノモトは腕組みをし、しばし目を瞑る。

召還された。帰る手段は不明。

であるのであれば、当面の生活を保障してくれることは大いにメリツトがある。

と考え最終的に「分かった。そういう事であれば助けよう」と承諾した。

なんでも、ノモトは元の世界ではボランティアアーミーだったとかで、

困っているなら助けるといふ信条があるそうだ。

「それじゃ、私は寝るわ。私より早く起きなさいよね。」

そういうと、ノモトの前で服を脱ぎ始めた。

「うわわわ、ば、何を!？」

「何を?寝るから着替えるに決まっているじゃない。」

ノモトは顔を真っ赤にして横を向いている。

気にせずルイズは着替えていく。

「アンタの世界ではどうだかしらないけど、

使い魔の前で着替えるなんて普通の事なの。

それと、アンタは床で寝なさい。毛布ぐらいはあげるわ。」

横を向いて顔を真っ赤にして

あたふたしていたノモトが

ピタッと止まる。

「(・・・使い魔って人間扱いされないのか)」

今更ながら、契約内容と世界の異常さと、

前途の多難さに気がつき始めたのだ。
そして、毛布と床を交互にみてから呟いた。

「アフガンの砂漠で寝るよりかは幾分はましか。」

- - -

「こちら、カモフラージュシックス。

このチャンネルをフォローしている部隊は返事をくれ。

朝、ノモトは目が覚めると通信機をいじりはじめる。

「（エンリケ、モンゴメリ、米軍、何処もつながらないな）」

改めて異世界に来ていることを感じさせられた。
そして自分の荷物を確認していく。

いつも使っているハンドガンのH & K MK23、
アサルトライフルのAK47、
そして爆発物と雑品が少々。

異世界に飛ばされたタイミングが出かける前で、
本当に良かったとノモトは思っていた。

風呂上りや丸腰の時だったらと思うとゾツとする。
何も知らないところにいきなり放り込まれた上に
頼れるものがないと言うのは、心細いものだ。

そして一通り確認すると、ベッドに向かう。

”ご主人様”のルイズを起こすためだ。

「ルイズ、起きろ。」

「んんー？」

目をこすりながら起き上がるルイズ。

「おはよう、ルイズ。」

「おはよう、ノモト。ってアンタは使い魔なのよ！
最後に”様”をつけなさい”様”を！」

そう言いながらルイズはベッドから降りて、
着替えを始めようとす。

「ちょっと、アンタ何やってるの？」

「・・・え？いや、装備のメンテを。」

「使い魔が着替えを手伝うのは当たり前でしょ！」

何を言っているんだ。という顔でノモトはルイズを見る。

だが、この怒りようは本気らしい。

とりあえず、服の場所を聞いて揃えさせていく。

「（エンリケかコワルスキーに見つかったら、何を言われるやら。）

この世界にはいない戦友達の事を考えてノモトは苦笑した。
きつと、全力での知り合いの戦友らに言いまわるに違いない。
場合によってはトモさんの耳に入り…っとノモトは思考をやめた。
想像しただけで恐ろしい事態だ。

「朝食に行くわよ。」

食堂。

ノモトは、ルイズの横に座り食事を待とうとする。
しかし、想像だにしない発言がルイズから飛び出す。

「何で椅子に座ってるの？使い魔は床で食べなさい。」

指をさした先、机の端の床には、
硬いパン1個と少し冷めた具の無いスープ。

「……」

「感謝しなさいよ。平民が貴族と同じ食堂で食べれるなんて
光栄なことなんだからね。」

ノモトは、朝食を見て自己暗示を始める。

大戦末期のガ島よりマシだ。

インパールよりマシだ。

スターリンググラードよりマシだ。

そして黙って完食した。

その時のノモトの顔は、朝なのに非常に疲れた顔をしていた。
食堂から出た後、ルイズはノモトに告げる。

「私は、授業の準備をしてからおとなしくまってなさい。」

「……ああ、分かった。」

言われたとおり、両足を肩幅程度に広げ、
休めの姿勢でルイズを待つ。

こういったところは愚直なノモトだった。

「あら、貴方がミス・ヴァリエールの使い魔の平民ね」
「はっ！ノモトであります。」

反射的に、軍隊調の口癖が出る。

現在の雇い主であるルイズと同じような服装をしているのであれば、自分より位が高いとの判断からだった。

「ふーん。ノモトね。服装はぱつとしないけど、

身体もがっしりしてるし、良い男じゃない。」

「ありがとうございます。」

褒められているのか値踏みされているのか分からないが、前向きに考えれば褒められていると考え、ノモトはお礼を述べる。

「私は、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。」

よろしくお願いするわね」

目の前の赤い髪、褐色の肌、凹凸のしっかりした肉体を持つ女性は名乗った。

「いちらじぞ。」

言葉とともにノモトは、目線をそらす。

自分には思い人のトモさんが居るとは言え、

目の前の女性は目に毒だった。

「ふっふーん。恥ずかしがらなくても良いですわ。」

私を初めて見た人は、大抵同じ反応をするんですもの。」

キュルケは、言いながら指先をノモトの頬にあて、輪郭をなぞるように滑らせていく。

まるで、サキユバスが男を誘っているように。

そして、指が顎まで滑りかけた瞬間だった。

「っ！危ない！」

危険な気配を察し、ノモトがキュルケを押し倒す。

キヤっと言う可愛い声を上げキュルケが倒れた上にノモトが覆いかぶさる。

そしてノモトの居た場所には、拳があった。

「この馬鹿犬！何、色目をつか・・・って・・・」

殴りかかった体勢のまま、ルイズが冷静にその場を見直すと、倒れたキュルケの上にノモトが覆いかぶさっている。

「貴方は大胆なのね。こんな場所でなんて。」

とつぶやき、頬を赤らめ、キュルケは目を瞑る。

そしてノモトは固まっている。

状況だけ見れば襲い掛かったのはノモト。

100人が100人とも、「あいつは獣だな」と言ってもおかしくない状況だった。

「こんんんんおおおお！！色情変態馬鹿犬うっうっう！！！！！！」

全力を込めた蹴りが、固まっているノモトの顔にヒットする。

思いがけない衝撃にノモトは横に吹っ飛び、意識を失った。

第2話・その名は迷彩君（後書き）

ゼロの使い魔が現在手元に無いので、友人に確認しながら作成中。
もう一度買い揃えるべきか・・・

第3話：オペレーション・デストロイ

「決闘だ！いや、これは平民への懲罰である！」

金髪の少年が高らかに宣言する。

ルイズの使い魔であるノモトは、その単語を聞くと肩をがっくり落とし、首を横に振る。

事の始まりは、こうだ。

ノモトが大戦末期に比べたら少し上質な食事を取っていたところ、メイドに金髪がずぶ濡れの子供が絡んでいた。

どうやら、本命の彼女に浮気がばれたらしい。

で、ばれた原因はメイドが落とした香水を拾ったからだという事らしい。

メイドが必死に謝罪をしているところに

そこにノモトが割り込み、言い放った。

「自分の失態を女に押し付けて、その上に躰だと称して暴力を働くだと！？」

それが漢のすることか！貴様の様なやつには地獄すら生温い！」

この時若干拍手が起こったが、目の前の金髪の子供、ギーシュは怒りに震えていた。

「ふん！平民風情が貴族に楯突くなんて、世の中を知らない平民はこれだから困る。」

まあ、主人がルイズだからしょうがないな。代わりに躰をしてやろう。」

ノモトは回避する手段を考えていたが、ギーシュの言葉をきいてス
イッチが入る。

そして、自分の持ってきた装備を思い出し、何を準備すべきか考
える。

「ノモト！ギーシュと決闘するなんて、貴方、そんなに死にたいの
！？」

横で震えていたルイズの叫びがノモトの耳元で炸裂する。

「それに、ギーシュはグラモン家・・・軍人の一家なのよ！？」

魔法を使った戦いには強いのだよ！貴方がいくら傭兵だって言っ
ても、勝てる相手じゃないわ！」

ノモトはその言葉を聞くと、手で顎を触り考える。

「っという事は、未来の士官様か。このままだと危ないな。」

ブツブツとノモトが呟く。

横にいるルイズは、「ちよっと！聞いているの！？」と言っているが、
ノモトは考え込んでいる。

考えがまとまったのか、ノモトは顔をあげてギーシュを睨みつける。

「決闘の場所は何処だ。」

「ふん！決闘では無い、懲罰だと言っただろう？まあいい。場所は、
食堂を出てすぐのヴェストリの広場だ。時間は30分後。神に祈る
時間ぐらいはあたえてやろう。分かったな。」

そう言ってギーシュは、食堂から靴音を鳴らし出て行く。

「・・・さて、僕も準備をするか。」

ノモトは駆け足で装備一式のある部屋へ戻ろうとすると、後ろから大声がきこえる。

「ノモト！あいつに今からでも謝りなさい！」

蚊帳の外に置かれていたルイズが顔を真っ赤にしてノモトを睨んでいた。

「・・・駄目だ。」

「何で！？あいつは貴族。貴方とメイドは平民。立場の違いがあるのよ？」

その言葉を聞くとノモトは、ルイズの目を真っ直ぐ見るようにしゃがみ込む。

「漢には、退いてはいけない時があるんだ。そこに貴族や平民なんて肩書きは無いよ。」

まっすぐにルイズを見つめ、ルイズが「わけがわからないわよ・・・」と呟き、ノモトから目をそらしたところで部屋に戻る。ここからは時間との勝負だった。

30分後・・・ヴェストリの広場

「先に着ているとは、平民とは言え、殊勝な心がけじゃないか。」

小馬鹿にしたように鼻をならし、ノモトを睨みつける。

「・・・勝負の方法は？」

「そうだな。どちらかが参ったと言うまででどうだい？まあ、君にしか必要が無い台詞だけだね。」

「了解した。」

「それと、僕は魔法を使わせてもらうよ。魔法こそ貴族の証だからね。」

そしてギーシュは、杖を取り出す。美しい薔薇の彫刻の杖だ。

「おいで、僕の美しいワルキューレ。」

杖を一振りすると、地面から一体の青銅の像が現れた。

「さて、懲罰の開始だ。行け、ワルキューレ！」

槍を持った青銅の彫像がノモトへと駆け出す。

「・・・」

ノモトは無言でポケットから金属の固まりを取り出した。

その金属は、何かのレバーのような形をしていた。

そしてノモトは、“ソレ”を握り締めた。

瞬間 地面が爆発した。

逆円錐を描くように土が飛び上がり、ちょうど真上を駆けていたワルキューレが粉々になって逆円錐の一部となる。

「・・・え？」

決闘を見ていたギャラリーの全員の意見だった。

「な・・・魔法！？君は貴族だったのか！？」

「ノモトだ。それ以上でも以下でもない！」

ギーシュは、乱れた髪の毛を右手でかきあげ、杖を振り直す。

「そつか・・・ならばこれはどうだ！」

地面から6体の彫像が現れ、ノモトに襲い掛かる。

「無駄だ。」

またしてもノモトは金属の固まりを握り締める。

連続爆発

6体のワルキューレが、瞬く間に逆円錐の一部となって消えていく。土煙が晴れた後には、抉れた地面と腰を抜かしたギーシュだけだった。

第3話：オペレーション・デストロイ（後書き）

一時的に書きました。

また後で修正したりしますので

よろしくお願いいたします。

え？教室のシーンが無いだって？

順番を変更してるんだよ、言わせんな恥ずかしい・・・／／／

第4話：プライド・運命の瞬間

ギーシュは目の前の光景を夢だと思ったかった。

”あ……ありのままに起こった事を言うぜ”と、誰かに語りかけたかった。

ワルキューレが目の前で爆砕された。

たかが平民と思っていた過去の自分に、出来るならば蹴りを入れ、

”もう一度考え直せ！”と言いたかった。

しかし、時間は進むだけ。決して元には戻らないのだ。

「もう終わりか？」

ノモトが問いかけるも、ギーシュは”あうあう”と言っばかりで返答がない。

戦意が無い事を確認すると、ノモトはゆっくりと近づく。

腰からL字の金属の塊を取り出しながら。

「う……うわあああああ！」

ヤバイヤバイヤバイとギーシュの脳は警鐘を鳴らす。

あの平民が手に持っているものは、”メイジ殺し”。

先端には穴が開いており、指の近くには引き金がついている。見たことはないが、銃であることだけは、分かった。

距離をとれば、命中は低くなると言われているが、腰が抜けて動けなくなっているギーシュには無理な行動だった。

ギーシュは杖を振り、「来るな！」と言いたいが、口から出る言葉

は「あうあう」といった、
言葉と呼んでよいか分からない音だけだった。

「戦いの地を知り、戦いの日を知らば、千里なるも戦うべし。だ。」

そして、ギーシュのいる位置まで距離を詰め、額に先端を押し付ける。

「（ああ・・・僕はなんて愚かだったんだ。ごめん、モンモランシー君を好きだともう一度言いたかった。）」

目から涙が溢れてきた。目の前の光景を嘘だと叫びたかった。

身体が震える。あの平民が、引き金を引いた瞬間に自分はこの世のものでは無くなるだろう。

そして、その時はきた・・・

カシュツ！ペチン！

「いたいつ！」

ギーシュは子供らしい　と言っても年相応の　悲鳴をあげた。

ノモトは、ギーシュの胸ぐらを掴み上げ怒鳴りつける。

その目は、怒りと悲しみをもっていた。

「貴様のせいで7人が戦死したんだぞ！？青銅の人形だから命は関係ないとも言つ気か？」

ギーシュは、混乱しながらも話を聞いた。むしろ、混乱しているからこそ目の前で話しているノモトの声が頭に入っていた。

「将来軍人になり、士官になって多数の部下を指揮する立場となる貴様は、その青銅の人形の如く部下を操るんだろ。だがな！貴様が青銅の人形のように使い捨てにした部隊にも、命が宿ってるんだ！貴様に分かるか！？命の重さって奴が！！」

ギーシュは黙る。そして、下唇を噛み、手は血がでそうになるぐらいに硬く握られていた。

今までこんなに怒られた事は無かった。

そして、ギーシュはノモトの顔を見る。

その目は、過去に兄が見せた顔と一緒だった。

「（ああ、あの時の兄も”部下を戦死させてしまった。”と悲しんでいた・・・）」

過去に兄の自室を覗き込んでみた時に、ワインボトルを片手に泣いていた兄の姿を思い出させる。

「僕の・・・負けだ。」

”勝てない”

ギーシュはそう思った。

目の前の平民は、技量もさることながら、人間としての大きさが違う。

「僕は今まで、所詮ゴーレムだと思っていた……。しかし、無駄に命を作り、戦死させていたんだな。」

ギーシュは、小声で呟いた。

” 兄様、今ならあの時の気持ちがかかります。”

その言葉を聞いたかどうかは分からないが、ノモトはギーシュ右手を握り、立たせる。

「僕の名は、ギーシュ。ギーシュドゥグラモン。貴方の名を聞きたい。教えてくれないか？」

ギーシュは、丁寧にノモトに問いかける。

「自分はノモトだ。コールサインは、カモフラージュ・シックス。」

「ノモトか。今日から師と呼んでも構わないか。いや、是非とも師と呼ばせてくれ。僕を将来軍人として恥ずかしくないように鍛えてほしい。」

ノモトは、一瞬焦った顔をしたが、すぐに爽快な笑みを浮かべた。

「分かった。新兵教育から始めよう。ただ、きついぞ。血反吐を吐くかもしれないが良いか？」

ギーシュは、一瞬たじろいだがすぐに真剣な眼差しでノモトの目を見た。

「ああ、構わない。」

「・・・了解した。それと、自分の事は教官と呼ぶように。」

ギーシュを立たせた時の右手は、まだノモトが握ったまま。

ノモトは、その右手をもう一度握る。

ギーシュに、ニカッと笑いかけた。

「よろしく、”戦友”」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7085v/>

カモフラージュ・ゼロ

2011年11月16日15時21分発行